

文化情報誌

たわわ

2026 No.128

「たわわ」というタイトルには「小さな情報がたくさん集まって多くの実を結ぶように」という期待が込められています。

音の葉を紡いで



ピアニスト 松本 色葉さん

今回は、将来を嘱望されている平塚市出身の若手演奏家、松本色葉さんにお話を伺いました。松本さんは、幼いころから様々なコンクールで入賞され、ひらしん平塚文化芸術ホールでもオープンライブや大ホールでの演奏会にご出演いただいています。

—ピアノを始めたきっかけは？

当時通っていたリトミック教室の先生がピアノも教えていらっやったことがきっかけで、3歳の時から始めました。自分のやりたいことに挑戦させてもらえる環境や出会いに感謝しています。

—クラシック音楽の魅力についてどのようにお考えですか？



何百年も前に書かれた作品が想いを受け継ぎ今に至るといところで、輝きの刹那があると感じています。過去を再現しながらも、決して複製ではない生演奏による表現は、その人ならではの音楽が凝縮されるところに魅力を感じていて、私もその一員になれるよう、日々音楽を追求しています。

何百年も前に書かれた作品が想いを受け継ぎ今に至るといところで、輝きの刹那があると感じています。過去を再現しながらも、決して複製ではない生演奏による表現は、その人ならではの音楽が凝縮されるところに魅力を感じていて、私もその一員になれるよう、日々音楽を追求しています。

—ピアニスト、音楽家になろうと思ったのはいつごろですか？

幼い時からピアニストへの憧れはありつつも「ピアノが好きな小中学生」というような感覚でした。でもこの道を志して高校から音楽学校に入学したことで、自ずと「音楽家」という意識が芽生えたように思います。

また、地元ひらしん平塚文化芸術ホールが建てられたことも、私にとって嬉しい出来事でした。中学2年の3月に開館し、中学3年の12月、オープンライブに出演させていただきました。高校受験を控えていた時期に、平塚で初めてのソロコンサートができたことも、大切な経験になっています。

—現在は大学でどんな勉強をされていますか？

音楽と言の葉（ことのは）という2つを、自分の軸にして学んでいます。

器楽における音楽は言葉がなく、音であらゆることを表現しています。それを演奏するために、あえて私は言葉へ意識をむけて、音の背景を模索していきたいと思っています。そのために、日々読書の時間も大切に、音楽に関連する書物だけでなく、哲学書や詩集などにも触れ、まずは言葉というものを自分の中でしっかりと存在させることができるように努めています。



—音を言葉で理解しようと試みる感覚でしょうか。

もしかしたら、言語ではない音に言葉は不必要かもしれ

ませんが、私は、人間が言葉のない状態で感じたものを捉える時にも、どこかで言葉と繋がっている部分はあると思っています。それは頭で考えるということにも似てはいますが、演奏することは決して論文を書くことではないので、音の背景を想像して感じたものを音にしたいという気持ちに尽きます。やはり、すべては言葉のない音楽の演奏に昇華するためのひとつの道です。

—「音楽」ともう一つの柱である「言の葉（ことのは）」とはどういうことですか？

高校生の時から、日々のなかで印象的な出来事に接した際や、ふとした思索の過程をノートに書き綴るようにして、それらを「ことのは」と名付けています。世の中に溢れている「言葉」の数々を、自分の心で見つめてその濁点を取るかのように、ろ過することで「言の葉」に託していきたいという思いから始めました。自分で書いたものに限らず、時間をかけて育まれてきた言葉の姿を総称し、「言葉」と「言の葉」は区別して使っています。

—今後の目標などはありますか？

生涯音楽家で在れるように、まずはどのような音楽家として生きていくのかを日々考えています。今は言葉というものにこだわっている部分がありますが、実感の伴わない言葉ばかりが増えてしまうと、それは単なる数字の羅列と同じになってしまうので、言葉と自分の感覚がより近いところにいられるよう、五感を育てる経験を重ねていきたいです。映画を見たり、様々な自然に触れたり、新しい味を経験したり。ピアノの練習や読書と離れたところでの体験が、結果的に自分の音楽を、音の引き出しを増やすことにも繋がるといいなと思います。

—来年3月、ひらしん平塚文化芸術ホールでオープンライブを開催予定ですね。どんなプログラムを考えていますか？



「音の葉」と称して、高校からの同級生である声楽家の

片山和音さんと出演させていただきます。ホールアンバサダーの加藤昌則さんの作品を中心に、音楽と言葉が重なり合う新たな世界をお聴きいただけたら幸いです。

【プロフィール】松本 色葉

2007年 平塚市生まれ。

かながわ音楽コンクール ユースピアノ部門において、第35回 小学校高学年の部 優秀賞受賞、第38回および第39回 中学生の部 特選。第12回（2021年度）日本バッハコンクール 高校B部門 全国大会 金賞受賞。第6回 スタインウェイ・コンクール in Japan カテゴリー D入選。ひらしん平塚文化芸術ホールでは、「オープンライブNEXT」や「小粋な音楽人へ室内楽2025」等に出演。

これまでに、寺本準子、小林順子の各氏に師事。現在、三原未紗子、仲道郁代の両氏に師事。桐朋女子高等音楽科（男女共学）を経て桐朋学園大学に在学中。



みのる 木谷實・星のプラザ通信④

「木谷實・星のプラザの企画展示」

～好敵手呉清源と鎌倉十番碁～

「木谷實・星のプラザ」(ひらしん平塚文化芸術ホール2階)では、4カ月ごとに展示内容を入れ替える「企画展示」を行っています。

今回は、木谷の終生のライバルである呉清源、そして木谷と呉が共に七段の頃に実施された鎌倉十番碁について展示した企画展示「好敵手呉清源と鎌倉十番碁」の一部を御紹介します。

●木谷と呉のパネル写真●

昭和3年10月、15歳の時に中国から来日し、天才とうたわれた破格の三段、呉清源にも一人の強敵がいました。それが5歳年長の木谷實です。呉は、囲碁だけでなく生活全般にわたり木谷を慕い、木谷もまた呉から刺激を受け、二人は人気・実力とも昭和碁界を二分する存在となりました。今回展示した、来日当時の少年らしさを残した呉と木谷の写真(上段)からは、二人の生涯にわたる深いつながりの始まりを感じることができます。



●木谷實著『わたしの碁』(第一巻)●

木谷の著書『わたしの碁』(第一巻)から鎌倉十番碁に関する内容を紹介しました。

第7局以降についての木谷による回想からは、対局中の屈辱と闘志がひしひしと伝わってきます。



●呉清源著「呉清源回想録以文会友」●

呉著の回想録から、鎌倉十番碁と木谷との思い出についてのページを展示しました。木谷に対し「兄貴のような親近感を抱き続け※」ながら囲碁に打ち込んでいた呉視点の木谷の姿が伝わってきます。

(※引用：『呉清源著「呉清源回想録以文会友」』第八章)



●木谷と呉の写真が載った囲碁雑誌●

木谷と呉を特集した囲碁雑誌を4冊展示しました。多くの雑誌が紙面を割いていることから、当時昭和碁界の覇権を争っていた二人の勢いが感じられます。



●企画展示情報●

開催期間：令和8年5月30日(土)～令和8年9月30日(水)

企画内容：「囲碁と日用品 -水口コレクション-」

平塚市のアーティストが姉妹都市カウナスの市民を魅了

日本の文化を紹介する様々なイベントが実施される「ジャパンデイズ」が、今年もリトアニア共和国カウナス市で5月14日から16日までの会期で開催されました。

このイベントに、姉妹都市の平塚市を代表するアーティストとして、箏奏者の佐藤まさこさんと尺八演奏家の大山貴善さんが参加し、2024年12月にオープンしたばかりの国立科学博物館(サイエンス・アイランド)と、カウナス植物園の2ヶ所で演奏を行いました。



国立科学博物館での演奏の様子

国立科学博物館のコンサートでの演奏は、両国の国歌からスタート。「春の海」「さくらさくら」「七たおどり」など日本や平塚市を代表する演目のほか、「Lietuva brangi(愛しいリトアニア)」などリトアニア共和国内でおなじみの曲も披露されました。

コンサートのハイライトは、お二人による「二本の川のスタルティネス」の初演奏。この曲は、平塚市とカウナス市の姉妹都市交流をイメージして大山貴善さんが作曲したもので、日本とリトアニアの伝統楽器の共通点、さらには平塚市とカウナス市が二本の川に挟まれた地形であるという共通点から、「両市の異なる文化が川のように合流し、

その大河が幾久しく平らかに流れていくように」という願いが込められています。多くの名曲に加えて、両市の姉妹都市交流を象徴するオリジナル曲が披露されるというプログラムにたくさんのカウナス市民が心を動かされ、最後はスタンディングオベーションでお二人を称えました。



カウナス植物園での演奏の様子

また、カウナス植物園でのコンサートでは、カウナス市にキャンパスを有するヴィータウタス・マグナス大学の音楽アカデミーで



ヴィータウタス・マグナス大学音楽アカデミーの学生の皆さんと

声楽を学ぶ学生の皆さんと交互にパフォーマンスを行うなど、姉妹都市カウナスとの大変貴重な文化交流の機会となりました。

ひらしん平塚文化芸術ホール 主催事業レポート Vol.10

ひらしん平塚文化芸術ホールで実施している、さまざまなジャンルの事業の様子をお届けする主催事業レポート。第10弾の今回は、4月11日(土)、12日(日)、29日(水・祝)に行われたCHALLENGE！体験シリーズvol.13「レセプションist体験講座」を紹介します。

レセプションistとは、施設や会場でお客をお迎え・ご案内し、心地よく過ごしていただけるようおもてなしする仕事です。今回の体験講座は、これまで数々のコンサートホールや劇場の運営、公演の企画・制作、海外アーティスト^{しょうへい}招聘に携わってきた門田 恭子(かどた やすこ)氏を講師に迎え、ひらしん平塚文化芸術ホールの接客・接客スタッフとしての技術を座学と体験で学ぶプログラムです。

初日の4月11日(土)はホール全体の見学ツアーや、多目的ホールでの座学を中心に、基本的なホール用語の説明や接客の心がけについての講義のあと、それらを踏まえたエントランス業務や座席への案内等のシミュレーションを体験しました。

4月12日(日)は前回学んだことを活かす実践形式の体験で、特に本番を想定した仮公演が興味深い内容でした。参加者は「公演時に想定される様々なミッションを持った観客役」と、「学んだことを活かしてトラブルに対応するレセプションist役」に分かれてそれぞれの役割を体験し、その後の振り返りでどんな対応をしたか、よりよい対応方法はあったか、などを各自で考えて共有しました。



12名の受講者は10代から70代までの幅広い年代で、将来舞台関係の仕事をしたい方、観劇が好きの方、ちょっと興味があって参加した方等、目的も様々でしたが、隔たり無く意見を交わし合い、助け合っていたのがとても印象的でした。

そして最終日の4月29日(水・祝)、いよいよこれまでの講座の成果をお披露目する公演、「初めての音楽人へ 加藤昌則&宮田大」での実地研修がありました。お揃いの緑のスカーフをつけたレセプションistの皆さんが、緊張した面持ちながらも来場される大勢のお客様に、心をこめて受付や案内を務めている姿が見られました。

参加者のうち、6名の方はひらしん平塚文化芸術ホールのレセプションistとして今後も活動予定とのことです。

ひらしん平塚文化芸術ホールでは、今後も「CHALLENGE！体験シリーズ」を開催予定です。様々な体験をご用意していますので、是非挑戦してみてください！



発行 平塚市文化・交流課

〒254-8686 平塚市浅間町9-1

電話 0463-32-2235

FAX 0463-21-9756

E-mail: bunkoh@city.hiratsuka.kanagawa.jp

令和8年(2026年)6月15日発行

右の2次元コードより文化情報誌「たわわ」へアクセスできます▶▶



平塚市文化振興基金に御協力を

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活用されています。

基金に御協力くださる方は、平塚市文化・交流課まで御一報ください。